

表現活動を中心にした高校一年生（現代国語）の授業

九野里 信 夫

一、初めに

高校一年生の生徒達が、様々なきつかけを通して、多様な表現活動に取り組めるようにと、四月から次のような取り組みを行なってきました。東山高校は京都市にある男子校で、現在の一年生は十クラスです。男子校の一年生達が、自分の身の回りの事実や出来事、自分自身の生活や今までの自分の歴史、心の中の様々な思いを自分の言葉で綴り、教室の中で交流しあう。授業の中で読み合った作品や文章を手がかりに、生徒達が再度自分の生活や感情、自分の姿、そして言葉を見つめる機会を持たらと思ひ、一年間の授業の中で次のような表現活動に取り組んできました。

- (ア) 「自己を語る」(一学期の授業開き)
- (イ) 「ある日ある時の出来事を記す」(一学期)
- (ウ) 「夏休み検証」(二学期最初の授業)
- (エ) 「自分の身近なもの、関心のあるものについて論理的な文

章を記す」(論説文の授業の導入・二学期)

(オ) 「短歌・創作」(韻文学習のまとめ・韻文創作の初期段階・

二学期)

- (カ) 「ノートを使って考え表現する」(年間の授業の中で読解作業を通して、生徒達がノートに自分の読みを記して行く。作品についての一次感想、作品の構造、作品の形象——作品に描かれている時や場や、人物や、人物相互の関係や葛藤——、主題などについて、生徒達が読み取ったものをノートに記して行くものである。授業時においての問答や、意見の交流や、議論の後に、ノートに各自の読みや意見を記して行く取り組みである。)
- (キ) 「創作文」(三学期)(自分や身の回りの人物を登場人物にした物語を創作する。)

二、生徒作品から

一学期の授業開きで、自分自身を自己紹介するつもりで「自己を語る」文章を書くことから国語の授業をスタートする生徒達です。

真新しい白紙の用紙に自分自身のことを書き始めた生徒達ですが、真っ白な用紙には高校生活への不安や期待が綴られています。その後、随筆作品である「まぼろしのタカオトノボ」（矢口高雄）の読解の授業を行い、続いて生徒達は自分の心の中に残っている最も印象的な「ある日ある時の出来事」を、時間の流れにしたがって生き生きと文章表現することに取り組みました。高校一年生の新学期の五月。ようやく知り合いになりました自分のまわりの生徒達と相談しながら、一人一人の生徒は用紙にシャーペンを走らせ出します。

(1)「ある日ある時の出来事」(一学期・五月)より

A君――

「中学三年生の頃だった。僕はじゅくやクラブや友達の間でイライラしていた。まわりの人達はいつもうざく見えた。でも無理をして笑ったりしていた。そんな時に友達が冗談で僕を押した。足場が悪かったのか僕はふっとんだ。それで壁に頭をぶつけて言葉では表現できないような変な感じになって『ぐわん、ぐわん』と感じになった。そして僕は相手の顔面をおもいっきりなぐつてけり倒した。相手は口から血が出て倒れていた。その時の僕はむねがはりさけそうなくらい『ドクン、ドクン』としていた。そして頭が『ぐわん、ぐわん』と痛い程になった。相手もそんな感じ

だったと思う。僕はその場から離れた。……」

B君――

「あの夏の日に僕はとんでもない恐怖を味わった。そう、あれは小学四年生の時だ。弟と友達二人（小学3年生と中学生）の四人で近くにある野洲川へ泳ぎに行った。野洲川は事故が多く、危険なので子供達だけでは行つてはならなかった。ましてその前の日は大雨が降り、川の水位は増していた。しかし、そんなことは気にも止めずさっそく川に飛び込んだ。すると思っていたよりも流れが速く、立っていても足がガクガク震えていた。それほど流れはきつかった。中学生の人が『大丈夫だ。』と言ったので川の中を歩き出したら事件は起こった。いきなり足と共に体が水中に沈んだ。バランスをくずした僕は押し流された。もう頭の中は真っ白になり、心臓が止まりそうになった。無我夢中で水をかき回し、流れにさらって泳ごうとしたが無駄だった。ふり返ると岩があったのでつさにつかんだ。が、むなしくも押し流された。それほど流れは速かった。もう駄目だと思った瞬間中学生の友達が岸で僕がそこに流されるのを待っていた。必死になって体をたてようとしたが真っ青になった。もう足もつかないほど深くなっていたのだ。このまま流されて琵琶湖までゆくんだ。頭の中は絶望でいっぱいだった。すると頭の中に小さな声が入ってきた。『そのねん土をつかめ』と、ねんどをつかもうとしたが無理なのでやむをえず手をつつこんだ。なんとか止まり、友達が岸にひき上げ

てくれた。少し水をのんだ程度で助かったが、それ以来野洲川に泳ぎに行かなくなった。」

「文章表現することをいやがる生徒が多い」、「自分の心の他の誰かに示すことを恐れる」、「他者の視線や言動にものごく気を使う生徒が増えてきた」、「教師の思いを先読みした文章や、気に入られようとする文章、借り物の言葉で書かれたものが多く、独自の言葉や内容を持った生徒作品が減ってきている」。なかなか主體的に表現活動に取り組まない現代の高校生の状況が、このような言葉で語られることが多くなっています。

しかし、この国語の授業の中では、必ずしもきれいな言葉やきまった内容を書かないで良いという事に安心したのか、生徒たちは幼い言葉ながら、自分の心に残っている過去の「ある日ある時の出来事」を、過去形表現を中心にしながら描き出して行きます。生徒達の文章には、体験にもとづかないと出てこない音や、情景を表す言葉、その生徒にしか描けない事実があらわれて来ました。練られていない言葉ながら、体験したその人にしか味わえない事実や、他の人間にはない視点や感覚、感情や言葉が登場して来ることは大変興味深いことでした。

C君――

「その日はあつかった。夏も真つさかりの時だった。岩がむき出した急な坂を息をきらしながら歩いてた。山の緑の間に町の

けしきが所どころに見える。するとむこうの方からカチカチと音がする。なんだろうとその音の方へいってみるとスズメバチが何匹かそこにいた。そのハチの目は、こちらをにらんでいる。一しゅんだった。そのハチはぼくの頭のすぐそばをとおりぬけていった。さされなかった、そう思っていたが、岩の上でたおれてしまい、背中をすった。あまりにいたく山をそれ以上のぼれなかった。その後かえってみると背中のみみずばれと切りきずでいっぱいだった。これからすこしの間、せもたれのあるイスにすわれなかった。」

D君――

「その後なぐられまくりましたが痛みはあまりありませんでした。そしてなぐられ終わりました。ぼくは、痛みを感じませんでした。その後、トイレに行つて鏡を見みると顔が2倍ぐらいにふくれあがっていました。それを見てから痛みが急に僕におそいかりました。そのことがあつてから人を見る目が変わりました。」

E君――

「あれは、僕が小学二年か三年のときだった。僕は友達と学校にあるジャングルジムでおにごっこをしていた。友達がおにで僕はおにからにげていた。僕はジャングルジムの上から下へおりようとした。おされた。僕は何かおこったかわからなかった。みんながすごいスピードで上にあがった。僕は下に落ちた。しばらく

動けなかつた。」

F君——

「自分が小学校4年生のときのことである。その日は雲一つない青い空で、いつも通り家のとなりの分団集合場所に集合した。家の前は車や人通りが少なく、ただ風にゆられる木の音がザワザワとなつていただけだ。家には一匹の犬がいた。そのころはよく家から勝手に自分でさんぼする少し変わった犬だった。その日も家の外の玄関にすわっていた。その時である。家の前にある道をネコが横切った。とつさにそれを目にした犬は、ネコを目にもとまらぬ早さでおいかけた。そしてその時である。いつも静かな道に聞きおぼえのある太い音がした。その音はしだいにこちらへ向かつてきた。そう、車である。その車はいきおいよく犬に向かつて走つてきた。犬を目にした車はとつさにブレーキをふむ。犬はおどろいてとびあがる。静かな町にするどく大きな音がなりひびいた。犬はきせきにもキズ一つなくおえた。あと一秒、5秒ずれていれば一つの生が消えていただろう。その犬は3年後子を四匹出産し、その子どもたちはすくすく育っている。」

生徒たちは、読解の授業の時よりも高い関心を示しながら用紙に向かつていきます。また、生徒作品を載せたプリントをクラスに配つた時の関心も大変高い。学校や家でのこと、近くの川や山での出来事、けがのことや、ケンカのことや、危険なことや、友

達のことや大人のこと。受験のことやクラブでの試合の出来事などが登場して来るプリントを、静かに食い入るように読み、しばらくしてから、「これ、だれの文章や?」、「この文章はほんまにリアルや」、「おれも同じ経験したことある……」などと、わいわい言い合う。これはどのクラスの生徒達にも共通の状況のようです。生徒たちはこの後、推敲の取り組みに移つて行きました。

(2)「夏休み検証」(二学期最初の授業)

長い夏休みを終えた二学期最初の国語の授業。二学期の授業の予定を話した後、生徒たちは先輩達が在校時に書いた「夏休み検証」の文章を目にします。生徒にとつて先輩の文章は大変魅力的な教材であるようです。暑くけだるい雰囲気先輩の文章の登場で大きく変わつて行きます。先輩の文章を読んだ後、生徒達が書いた作品の中に次のようなものがありました。

G君——

「幼い時のサッカー友達が死んだ。僕は、今でも信じられないくらいや。あれは、夏の中頃、台風11号が来た時、その台風は、ちよつと変わった台風でゆつくりした台風だった。そのせいでも活も身が入らず、毎日が過ぎて、台風も過ぎた。次の日、僕は朝起きて、目をうたがうように携帯のメールを見た。『小学校の時の友達が行方不明になつたぞ。』と書いてあった。おどろいて、朝刊をみると書いてあった。『16歳の少年 川でおぼれて行方不明』と

書いてあって、友達に本当かどうか聞いてみたら、本当らしい。

それから2、3日たつて、『友達見つかった。死んだ。』つてメールがきて、朝刊をみると書いてあった。見ている時、電話が鳴って、取ったら、友達からの連絡もうだった。『今日、おつやがあるから来てくれ。』つと。その日は練習試合だったけど、全くやる気がなかった。その日の試合は最悪だった。

おつやに行ったら、友達がいて、一緒におしようこをした。この夏休みは、みじかな友達が死んだことだった。今でももしじられない。」

G君はいつもと何も変わらない様子で夏休み中のサッカー部の練習に取り組み、元氣そうに試合にも出場していました。懸命にプレイする姿を私は直に見ていましたが、彼がこのような体験をしていたことには全く気づかなかつたのです。しかし、その何日間か、G君の心の中には、「友達の行方不明、遺体での発見、おつや、友達の死」という大きな出来事が渦巻いていたのです。そのことが、「夏休み検証」によつてはじめてわかつたのです。表現活動は、高校生が日常生活の中で自分を振り返り、自分の心の中を読み取り、自分の言葉で自分への認識を表現するという意味だけでなく、教師にとつても生徒を再発見する意味を持っていると言わねばならない。生徒のことを知らないままに教壇に立っていることが、我々には大変多いということを、子供達の表現活動によつて改めて気づかされます。教育活動は、生徒の抱えている

事実をどのぐらい知り得ているかということが必須の条件ですが、その意味でも国語の表現活動の意味は大変大きいと考えられます。

「作文教育の目的は、自分の生活に根ざした体験や感動、自己主張を言語で綴ること、表現することによつて、現実根ざしたものの見方、考え方、感じ方を高めていくこと、つまり『生活として』のこぼの力を伸ばしていくことであるととらえていいのではないか。『自分を表現することは、生活者としての自分をより確かに豊かにつくっていくことである』」（浅尾紘也・「国語の学力を考える」）

「学力が言葉の発達と密接に結び浮いていること、わけても、生活に根ざした生活実感のある言葉での『表現』が、学力のおおもとであること、書きつづることが学力の形成にとつてどれほど大切なこと、なぜ書くことがこんなにも大変なことなのでしょう。それは、まず、書く対象（事物・人物・事象等）をしつかりと、ありのままの姿で見つめ、とらえることができる力が要求されるからです。さらに、みつめた対象を分析したり総合したりする力が必要です。そして、これらの力をトータルに蓄えた上での一定の認識がないと、書くことによる『表現』はできません。逆にいえば、書くことを通して、そうした力を育て、鍛えて行くことになりす。」（河瀬哲也・「学力・生活・集団」）

表現することの意味を両氏は右のように述べています。たとえ幼い言葉や、練られていない文章表現であっても、生徒達が自分や自分の周りのもの——自分や自分をとりまく事実や世界に対し

て、それらを見つめ、認識し、それらを自分の体や心を通して表現して行くことが学力のおおもとであり、生活者として生きて行くためにも必要になってくる。考えながら生活して行く力を生徒達が身につけるために、そして、教師自身が子供達のありのままの姿と成長を発見する為にも、様々な表現活動に取り組みさせる必要があると改めて考えさせられます。

三、韻文の授業

「自己を語る」、「ある日ある時の出来事」、「夏休み検証」などの表現活動とともに、随筆や小説、論説文の授業に取り組んできた生徒達は、二学期の後半に入り、韻文の授業に取り組み出します。そしてその授業の後に、韻文の授業のまとめとして、生徒達は「短歌創作」に取り組みました。

韻文の授業の様子とその後の短歌創作について述べて行きたいと思います。

(一) 一時間目の授業

(Tは教師、Sは生徒の発言をさす)

T .. (黒板に次のように書く)

① () 文 (詩・短歌・俳句)

T .. () の中に何が入るだろう？誰か分かる人は？ (ここで分かる生徒は出てこない)

T .. () には「リズム」という意味の言葉が入る。リズムは「音」でもあるので、漢字の左側には、「音」という文字が入る。(ここでS1が、手を挙げる)

S1 「いんぶん」。

T .. そう、S1の言うとおり、リズムのある文を韻文と言う。

(つづけて黒板に次のように記す)

② 世界最小の詩 II ()

T .. S2、() には何が入る？ (S2は答えられない)

T .. S3、どうや？

S3 .. 俳句：か？

T .. そう、そのとおり。俳句と全員ノートに書いてください。

(その後で、次のように黒板に記す)

③ 「() をしてもひとり」 (尾崎 放哉)

T .. 「放哉」は何と読むの？

S4 .. 「ほうや」。

S5 .. 「ほうそう」。

T .. これは「ほうさい」と読む、「おさきほうさい」。では、() の中には何がはいるやろう？「をしてもひとり」と感じる .. 。そこには、どんな言葉がはいるやろう？

S6 .. 「恋」。

S7 .. 「旅」。

S4 .. 「病氣」。

T .. なるほど「病氣」ね。この俳句は病氣に関わっているかも

しれない。そして、この言葉は「冬」にも関連している言葉や。冬に関連する言葉で、漢字にしたら一文字、かなで読んだら二文字になる。(生徒たちは黒板を見ている。しかし、しばらく沈黙が続く。前から2列目のS8が、小さな声で)

S 8: 「せき」。

T: 「そうや、「せき」や。「せき」してもひとり」という俳句や。「せき」は冬を表す言葉。冬の季語や。ところで、この「せき」、漢字で書ける人はおるか？(S9が手を挙げるとり。「ゴホン、ゴホン」とやっても、だれも反応する人はない。その一人きりの状況を、尾崎放哉はたった九文字の俳句に描いた。

(続けて黒板に記す)

④「算」()の少年しのび泣けり()「(西東 三鬼)

T: 「西東」は何と読むの？(生徒は口々に「さいとう」「せいとう」と言っている。)

T: 「これは「さいとう」と読む。「三鬼」で「さんき」ところで、S10、「しのび」は、どういう意味や？

S10: 「しばらく考えながら、」がまんすること」。

S8: 「たえること」や。

T: 「そう、そのとおりや。「しのび」は「がまんしたり、たえたりすること」や。そうしたら、「泣けり」はどういう意

味や？

S11: 「泣いた」。

T: 「S11、「泣けり」を二つの言葉に分けるとしたら、どこで切れる？

S11: 「泣」と「けり」。

T: 「なるほど、「泣」と「けり」やから、「泣いた」という意味になるんやな。なるほど。しかし、これは「泣け」と「り」とに分かれている。意味の分かる人は？(ほとんどのクラスでは出てこない)ここでは、「泣いている」という意味に考えて欲しい。「泣いた」という過去の出来事ではなく、「今も少年が泣きつつけている」と考えられるとしたら、()の中には何が入るやろうか？声を出さないように我慢しながら少年が泣きつつけている。少年は何をしているのやろう？(生徒は「数」と口々に言っている。)

T: 「算数」は現代の小学校での科目。もっと古くはどう言ったの？

S6: 「術」。

T: 「そうや、「算術」。戦争前までは、「算術」という呼び方だったらしい。この言葉一つ取っても、昭和二十年より前に作られた俳句だと言うことが考えられるね。では、もう一つの()には何が入る？季節を入れて欲しい。

S12: 冬。

T: 「なんで、冬や？

S 12 .. 受験の時やと思う。

T .. 受験の時で無かったとしたら？（生徒は「春」、「夏」と口々に言っているが）「しのび泣き」の少年がしていることな何やろう？

S 6 .. 宿題とちやうか。

T .. そうや、宿題や。小学生の少年が宿題をしているとしたら、ここにはS 13、どの季節が入る？

S 13 .. 夏やと思う。

T .. その通り。夏休みのある日、算数の宿題をしている、やらされている小学生の少年。もう夏休みも最後の方なのやろうね。日が残り少ない。算数の宿題を前にして、我慢しながら泣きつづけている、それを父親がじつと見ているというのがこの俳句の情景。俳句には、季節を表す言葉が入る。そして言いたいことを直接表現せずに、どちらかというところ間接的に表現することが多く、ある場面を映画のフィルムの一コマを切りとったように表現していることが多いということを知っておいて欲しい。（次のように黒板に記す）。

⑤「凍てし土 指もて掘りし 遺品かな」

T .. S 14、「凍て」は何と読む？

S 14 .. 「いて」。

T .. 「凍て」って、どんな意味や？

S 14 .. 「こおる」ということと違うかな。

T .. その通りやね。では、「し」はどういう意味や？古典の授

業で教わったと思うけれど、どういう意味やった？（クラスによつては、「し」の意味がなかなか出てこない。）

S 11 .. 「なにになにした」やったと思う。過去の意味。

T .. そやね、「し」は過去の助動詞「き」の変化したものであったね。だから、意味は「凍った」ということになる。S 15、この俳句を読んでみてくれるか。

(S 15、続いてS 16、S 17を指名する)

T .. 「し」は過去の意味やから、「凍りついた土」。それを「指」を使つて掘つた、「遺品かな」。「遺品」は「死んだ人が後に残した品物」。季節はいつやろう？S 17。

S 17 .. 冬。

T .. なんてや？

S 17 .. 土が凍っているから。

T .. その通りやね。では、その凍つた土を、わざわざ指を使つて掘りださな、あかんかったって、どんなことがあつた時の俳句やろう？この俳句の背景には、どんな出来事があるのやろう？（生徒は口々に「戦争」、「爆撃の後」、「火事の後」と言っている）これはここ最近起こつた出来事の後には作られた俳句。ここ十年内の出来事としたら？

S 11 .. 地震や。神戸の地震や。

T .. よく分かつたね。阪神大震災の後、おそらく大事な人が亡くなった。その人の遺した品物を大変大事そうに掘り起こしているもう一人の人の存在。その人も「遺品を掘り起こ

するための道具」を持っていないのかもしれない。自分の指を使って必死で掘り起こしていることが読み取れる。それでは今日の最後、この俳句。

⑥ 「冬晴れの天よつかまるものがない」

T .. (S 19、20が指名音読) 季節は冬。「冬晴れ」と言うのは、冬なのに雲一つない天気のこと。(窓を開けて) 今日のような天気のことかも分からないね。「天」とあるが、「天」にはどんな意味があるの? S 1。

S 1 .. 空。

T .. 空やね。ほかにはどんな意味があるのやろう?

S 2 .. 天国。

S 3 .. 神。

T .. なるほど、なるほど。そしたら、「天と地」と言ったら?

S 4 .. 上と言う意味。

T .. なるほど、そうしたら、この人(この俳句の作者、あるいは話者)はどんな状況で、どんな気持ちでこの俳句を詠んでいるのやろう? わざわざ「空」と言わずに、「天」と言っている。

S 5 .. この人は、病気で死にかけている人やと思う。

T .. なんて、そんなことがわかるの?

S 5 .. 「つかまるものがない」と言うてるのやから、これから落ちて行く、つまり、死んで行く人やと思っていると思う。

T .. そのことを裏付けているのは、「つかまるものがない」と

言う言葉のほかには何かあるかな?

S 5 .. 「天」は「死」ぬことを言っているのやと思う。

S 6 .. 「晴れ」は「悔いがない」事を表していると思う。

T .. S 6は、この人はどんな人やと思うの?

S 6 .. 戦争に行った人の事やと思う。特攻隊か何かで、これから死に行く場面やと思う。

T .. この俳句と同じ境遇の人達が詠んだ四つの俳句を紹介したい。この合計五人に共通するものは何か? 五人に共通した体験や境遇は何か? ノートに書いてください。

⑦ 「春雷や冷たき母であれば良し」

⑧ 「梅雨晴れの光を背負いふりむかず」

⑨ 「待つということ恐ろしく春の闇」

⑩ 「布団たたみ雑巾しぼり別れとす」

(2) 生徒ノートより

五つの俳句に対して、旅をしている人、別れを待つ人、受験生、戦争に行く人という読みの他に、多くの生徒達は次のような読解をノートに記してきた。

・「五人とも恐ろしくや、つかまるものがないや、別れや、ふりむかずなど、なにか悲しがついていると思う。『死』についてのべていると思う。」(S 9)

・「死刑を言い渡された人達が残した俳句じゃないかと思う。待

つことが恐いなど、そこには行きたくないが、しかしそこから逃れることはできないといった表現から思った。」(S10)

「とり返しのつかないことをしてしまった人の作品だと思う。」

『つかまるものがない』…すがるものがない。『冷たき母であればよし』…温かい母であるからつらい。『光を背負い振り向かず』…光の反対は闇、闇に向かって歩いてる。未来に光はない。」(S11)

・『⑩の『布団たたみ雑巾しぼり別れとす』というところで、(自分の)頭の中に『ろうや』というキーワードがうかんだ。そして最後にきれいにそうじて別れをつげたと思った。死刑というのほだいたい早朝にやるものだから⑨の『待つ』ということ…春の闇と』死ぬ前夜に書いた。」(S12)

・『⑩の俳句で『布団たたみ』と『別れとす』という言葉から、明日がないということがわかる。⑨の俳句で、次の日に死ぬのが恐いので夜ねつけなかったという感じがする。」(S13)

・『⑥『つかまるものがない』は首をつられてつかまるものがなく、このまま死んでいくと覚悟している。⑩は自分の家にはもう二度と戻ってこられないという気持ちがある。』(S14)

・『布団たたみ雑巾しぼり別れとす』から、そうじをしているので、かまごくから出て行くことがわかる。⑨で待つということと恐ろしくとあるので、出所するのではなく、死刑ということになる。⑦の冷たき母であればよしにはやさしい母にみれんが残り、冷たい母なら別れを惜しむこともなかったのに、という

事。」(S15)

・『天よつかまるものがない』は今まさに死の瞬間で、目の前には首をつるもの以外なものはないということ。『つかまるものがない』といっているから、たすかりたいという気持ちもあると思う。『布団たたみ雑巾しぼり別れとす』は、自分が長い間いたろうやをきれいにするのは、死ぬ前の人がよくする。あと何時間後(か)にこの人は死ぬ。」(S16)

⑥〜⑩の俳句はいずれも、死刑を目前にした人達が死の直前に詠んだ作品です。生徒達は授業の中の問答と、ノートの作業を通して、五つの作品に描かれた状況や人物形象のおおよそを読み取って行きました。授業の中で提示したどの作品も、高校生達の大変高い関心を集めました。授業の中では生徒全員の顔がまっすぐ立ち、黒板に引きつけられるような状況になりました。一年生のどのクラスの生徒も、本当に同じ様な表情をする。「五人はどんな状況の中で、一体何を見ていたのだろうか?どんな思いでいたのだろうか?五つの俳句はどんな世界を描いているのだろうか?」これらのナゾを何とか追求したいという気持ちが、高校生一人一人の心の中に浮かび上がって来ているようでした。俳句の中の一語ずつを手がかりに、俳句に描かれた世界を何とでも読み取ろうとする姿があらわれた授業でした。

(特に⑥から⑩の俳句については、平安女学院高校の今村先生が実践されたものを、月一回開かれている「京都こくこ教科懇談

会」の六月例会の中で聞き、今村先生の実践を参考にさせてもらいながら、東山高校の生徒達の俳句の授業の導入に使ってみました。()

(3) 短歌の授業

俳句の授業に続き、西行、有間皇子、島木赤彦、石川啄木の短歌を学習した生徒達は、その後で斎藤茂吉の短歌の学習に入ってきました。

短歌は本来連作として作られていることが多い。「赤光」から九首の短歌を選び、その九首をばらばらに並べ直したプリントを生徒達に配布します。生徒を指名して九首を音読した後、おおよその意味を確認し、その後これらの短歌はどのような順番で短歌集に掲載されているかを生徒達に問いかけました。

- ① うちのくの母のいのちを一目見ん一目見んとぞただにいそげる
- ② 死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる
- ③ 吾妻山に雪かがやけばみちのくの我が母の国に汽車入りにけり
- ④ 灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり
- ⑤ 我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ
- ⑥ はるばると薬をもちて来しわれを目守りたまへりわれは子なれば
- ⑦ わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし
- ⑧ 星のある夜ぞらのもとに赤赤とははその母は燃えゆきにけり
- ⑨ のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

生徒達は短歌に描かれている場所や出来事の違いから、その短歌の順番を考え始めます。K男は「①・③は汽車の中。⑥・②は母のそば。⑤―死にたまひゆく―死ぬ少し前。⑨―死にたまふなり―死の瞬間。⑦―焼かねばならぬ―火葬のはじまり。⑧―燃えゆきにけり―火葬の途中。④―灰のなかに母をひろへり―火葬の最後。」と九種の短歌の書かれた順番を読み取ってゆきました。さらにB雄は、⑤と⑨を比較しながら、⑤の「我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ」の中の「よ」に注目し、「この『よ』は、母に対して呼びかけているものであり、そのことから母は(この短歌に)よまれている場面では」生きていることがわかる。それに対して⑨の『母は死にたまふなり』では、『よ』ではなく『は』と言う言葉が使われており、母に対してもう呼びかけていない。母がこの世にいたなくなつたことを示している。」と述べています。K介も「⑨の『死にたまふなり』の『たまふ』は、愛すべき母への敬意を示し、『なり』は現在を示す言葉であり、母の死の瞬間を示している。母の死の瞬間を敬意を持ちながら見ている。」と述べています。

短歌の学習の中では、短歌の中に間接的に描かれている時や場所や出来事や心情を、三十一文字の言葉を手がかりにして読み込むことを学習の中心にしてみました。短歌の中にどのような世界が描かれているか。西行の「花のもとにて春死なむ」に込められた心情、有間皇子の「旅にしあれば椎の葉に盛る」に込められた思い、「隣室に文読む子らの声聞けば心に染みて生きたかりけり」

を詠んだ島木赤彦はどのような場所で、どのような状態であったのか、「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにくく」の中の「停車場」はどこか、なぜ「ふるさとの訛」が懐かしかったのか、…。短歌の中の一語一語を手がかりにして、高校生達は、そこに描かれている世界を読み取る学習を続けました。その生徒達が韻文学習のまとめとして、今度は短歌創作に取り組み出します。

(4) 短歌の創作（高校生としての最初の一首）

二期期の後半に生徒達が描き始めた短歌の一部は次のようなものでした。自分の現在の状況や心情を三十一文字に込める取り組みは、高校生には新鮮な作業のようで、指を折りながら用紙に向かい、出来あがった仲間の短歌を読み、その後で評価して行く姿は非常に生き生きしていました。

- ・「京都」という ひびきにさそわれ きてみれば 男ばかりの悲しき現実
- ・秋風に ふかれて遊ぶ 小鳥達 余もあのように 自由に生きたし
- ・別れ道 もうもどれない 道だから 後悔しても 先を貫く
- ・しつれん日 立ちすくむ我 外に雨 さめし心は 雨に流れたり
- ・戦争が 開始されても 日本では 普通に生きて 実感無し
- ・リストラで 賑わい消えた ふるさとよ 売り声もなく 渋滞

表現活動を中心にした高校一年生（現代国語）の授業

- もなく
- ・毎日が あつというまに すぎていく 速く速くて ついていけない
- ・部活から 帰ってくると 家静か 一人で食べる 晩ご飯
- ・最近 は つかれにつかれ 家帰り 親とけんかし そのくりかえし
- ・毎日が いつもおんなじ くりかえし 毎日つかれる こんな自分
- ・テスト前 まだまだだと 思っていたら 白紙の上で シャーペン転がす
- ・世界中 普通普通と 言うけれど 誰が決めたの 普通って何？
- ・限りある うつわに入り 外を見る 魚を見ると なみだがでると
- ・かささして くつをぬらした 集団の あいまを走る 赤い沢蟹
- ・戻りたい 自分の道に もう一度 今歩むのは 誰かの理想
- ・ノートあけ えんぴつはない ムダな時間 話も聞かず 目を閉じたまま
- ・しとね敷き テレビ見ている 今の自分 いつまで僕は こうしているのだろう
- ・夜の雨 静かな夜を にぎやかに 僕の気持ちを ほっとさせる
- ・行きなさい 夕日に映える 赤トンボ 田畑の上を 元気に飛んで
- ・いつのまにか 聞こえるだろう なつかしき 悲しさ漂う 母

の笛の音

・今はあき 空は秋晴れ ひつじぐも オレの教室 スノードロ
ップ

・秋風が 梢を揺らす 日曜日 居眠る母に そつと毛布かけて
・おじいちゃん 生きてるうちは わからない なくしてわかる
大切さかな

・高校に 入った時から 大学に 行く事ばかり 考える

・ばあちゃん オレが好きだと 言うばあちゃん オレのほうが
倍は好きやで

・テスト前 ノートにうかぶ ミミズ文字 自分のノート 解読
しなあかん

・横のまど 見える景色は 美しく 見とれていたら ノートは
真っ白

学年末の三学期の二月、高校一年生の彼らは、最後の締めくく
りとして、ただ今「小説づくり」に挑んでいます。

(くのり・のぶお 東山高校教諭)